

文化財 ニュース

19 2019

千代田区日比谷図書文化館文化財特別展 「江戸の人びと、本をたしなむ」

江戸時代半ばを中心に、出版・印刷技術の発達によって人びとの間に広まったとされる読書文化。本は娯楽として親しまれただけでなく、江戸の人びとの知的好奇心を刺激し、教養を深めるたしなみでもありました。

千代田区教育委員会は、平成8年（1996）に齋藤吉之氏が所蔵する書籍資料の寄贈を受けました。このコレクションには、齋藤氏が昭和期に古書店をめぐり歩いて蒐集した、和本や洋装本、洋書が含まれています。今回は、特にバラエティー豊かな和本の数々をもとに、江戸時代の書物や読書文化を紐解きます。滝沢馬琴の邸宅跡や本の街・神保町など、文学や出版とも関係の深い千代田区の歴史を交えつつ、和本の奥深い世界を紹介します。



齋藤氏旧蔵資料

会期：令和2年1月18日（土）～3月8日（日）

※1月20日（月）、2月17日（月）は休館

開館時間：月～木曜、土曜 10時～19時

金曜 10時～20時

日曜・祝日 10時～17時

会場：千代田区立日比谷図書文化館

1階 特別展示室

※入場無料

特別展「江戸の人びと、本をたしなむ」

千代田区教育委員会が寄贈を受けた「齋藤氏旧蔵資料」は、和本だけでなく、洋本や洋書など多岐にわたる、膨大な書物のコレクションです。今回の特別展では、特に和本を多数紹介しながら、江戸時代の出版や読書文化について注目します。

江戸の出版文化

元禄時代、京や大坂などの上方で町人文化が盛になると、井原西鶴の『好色一代男』に端を発する「浮世草子」が人気を博しました。その後、江戸でも出版文化が花開きます。鈴木春信が大成した江戸特産の錦絵とも交流しながら、その土地特産の酒を「地酒」と言うように、「江戸の地の本」としての地本が多数出版されるようになりました。



齋藤吉之氏（個人蔵）



『南総里見八犬伝』
(文化11年(1814)～天保13年(1842))



『善知安方忠義伝』第三編
(松亭金水作、万延元年(1860))

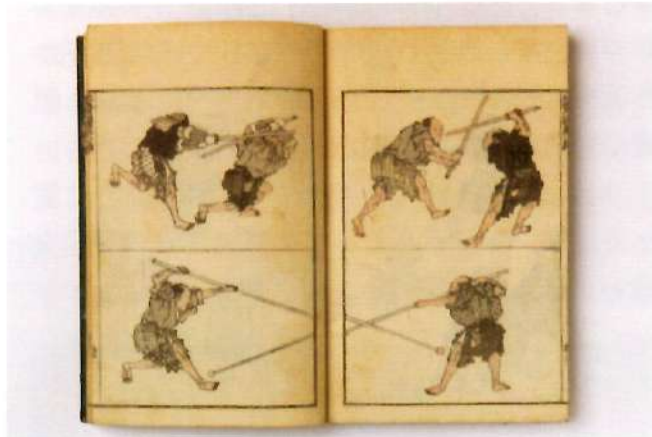
江戸で流行した書物たち

江戸に流通した書物には多くの種類があります。旅行記・紀行文は、『都名所図会』や『大和名所図会』、『畿島名所図会』など秋里籬島作の「名所図会」シリーズを先駆として流行し、「江戸時代のガイドブック」として人びとの旅のお供になりました。その後発売された十返舎一九作『東海道中膝栗毛』は、江戸のベストセラーとなりました。展示では、『続膝栗毛』が入っていた本製の書箱も合わせて紹介します。

同じく、江戸で特に人気を博したのは、戯作と呼ばれる小説でした。絵入りの草双紙や読み応えのある洒落本・滑稽本・読本が、人びとの娯楽としてたしなまれていきました。千代田区ともゆかりのある滝沢馬琴作の『南総里見八犬伝』や『椿説弓張月』、『夢想兵衛胡蝶物語』をはじめとして、『絵本太閤記』や『善知安方忠義伝』などの伝記物や復讐物、江戸時代にも変わらず愛読された『平家物語』や『源氏物語』といった古典など、江戸で流行した書物の数々を展示します。

知識を深める書物たち

江戸の人びとは、単に娯楽として書物を手にとっただけではありません。本は人びとに新しい情報を与え、知識を深める役割も果たしました。ここではより実用的な内容の本に着目し、江戸の人びとの知を支えた読書活動や教育活動をのぞきます。寺子屋の教科書として使用された『庭訓往来』、女子教育に関する『女小学教草』や『女中庸瑠璃箱』などを紹介します。また、葛飾北斎によって描かれた絵の手習本『北斎漫画』にも注目します。



絵手本である『北斎漫画』
海外では「ホクサイ・スケッチ」とも呼ばれる

書物・読書の近代化

幕末期に外国船が渡来し、開国、そして明治維新と時代が進む中、外国との交流が盛んになると、書物の分野にも近代化の波が押し寄せます。和本だけでなく、洋装本や洋書のコレクションも充実している「齋藤氏旧蔵資料」からは、江戸から明治へと移り変わる本の世界をうかがうことができます。

(学芸員 篠原杏奈)

※本文中特に表記がなければ資料は全て区教育委員会蔵

《関連講座》

「知を編む江戸の人びとー江戸時代の書物・蔵書を読み解くー」

日時：令和2年2月15日(土) 15時～16時30分

講師：工藤航平氏(東京都公文書館 専門員)

会場：千代田区立日比谷図書文化館 地下1階 大ホール

参加費：500円

定員：180名(事前申込、定員になり次第締切)

申込方法：往復ハガキに必要事項をご記入のうえ、下記宛先まで

①講座名 ②参加者全員の氏名(1枚で4名まで) ③郵便番号・住所 ④電話番号

※③、④は代表者のみ

宛先：〒100-0012 千代田区立日比谷公園 1-4 千代田区立日比谷図書文化館文化財事務室

《学芸員による展示解説》

日時：令和2年1月29日(水) 18時～

令和2年2月14日(金) 18時～

会場：千代田区立日比谷図書文化館 1階 特別展示室

※各回30分程度、事前申込不要、参加費無料

「千代田の小学校資料」

日比谷図書文化館では、平成 29 年 (2017) から学校資料の整理と調査を進め、戦前から戦後にかけての区内各公立小学校の資料群をまとめた報告書を、平成 31 年 (2019) 3 月に『資料で読み解く千代田の小学校 1』として刊行しました。総数 1,962 点の資料群のなかから、特に資料がまとまっている九段・西神田・神田・千桜の 4 小学校の資料を活字化して解説を付け、明治初期から戦中・戦後に至る千代田区の小学校の歴史・児童の活動・地域との関りを広く紹介しています。

今回の報告書刊行にあわせて、常設展示 V 室にて「テーマ展示」として小学校資料の展示を行いました。【写真 1】



【写真 1】「千代田の小学校資料」展示



【写真 2】「上六小学校震災日記」

※九段小学校は当時、上六小学校と呼ばれていた。

展示は、「関東大震災と復興」、「時代のうねりと小学校」、「戦時下の生活」、「コラム」の 4 構成となっています。報告書に掲載した資料の実物を見ることで、当時の小学校の活動や激動の時代のなかで学校、教員、児童たちがどのような学校生活をおくっていたのかがよく分かります。主な展示資料として、大正 12 年 (1923) の関東大震災の際に、九段小学校の教員が記した日誌、戦前期に千桜小学校で記録された一連の学校日誌などがあり、地域や社会情勢を映し出す資料となっています。【写真 2】・【写真 3】また、「千代田区の近現代年表」と併せて見ることによって、戦前期の千代田および日本の歴史を通して千代田の小学校の流れも分かります。

近年の少子化の進展とともに小学校数に変化が現れます。平成 10 年 (1998) に全国の小学校数は約 24,000 校を数えましたが、文部科学省の「学校基本調査」による最新のデータによれば、令和元年 (2019) の小学校数は約 19,700 校となっています。約 20 年で約 5,000 校の小学校が減っています。千代田区においては、人口は昭和 30 年 (1955) の 12 万人をピークに、平成 10 年 (1998) には、4 万人を切りましたが、その後増加に転じ現在では約 6 万



【写真 3】「千桜小学校 学校日誌」

人となり、子供の数も増加しています。この間、平成4年（1992）に千代田区の公立小学校の再編が行われ、現在では下記の【表1】のような編成となります。今回の報告書に記載した資料群は、小学校再編後に千代田区教育委員会に所蔵されたという経緯があります。

千代田区が昭和22年（1947）に誕生する以前の旧神田区と旧麹町区の公立小学校には、近代教育がスタートした明治の初期から現在に至るまでの長い教育の歴史と伝統があります。かつての小学校は地域の核となっていました。学校資料は地域のアイデンティティの形成に関わ

【表1】区内小学校の変遷

小学校（平成4年当時）	創立年	現在の小学校
九段	1903年	九段
富士見	1877年	富士見
番町	1870年	番町
麹町	1875年	麹町
永田町	1908年	
錦華	1873年	お茶の水
西神田	1903年	
小川	1900年	
神田	1876年	千代田
千桜	1882年	
今川	1908年	和泉
佐久間	1902年	
淡路	1899年	昌平
芳林	1909年	

『千代田区教育百年史』を基に作成

り、近代化の過程を証明し、郷土における教育の連続性を示すもので、学校、教員、児童、地域の人々の活動をありのままに映し出します。

各小学校には日比谷図書文化館が所蔵する資料群以外にも、学校及び地域の歴史を知る上で重要な資料がまだまだたくさん眠っています。日比谷図書文化館では、区内小学校に眠る多くの学校資料の調査・整理を継続して行い、これらを適切な方法で保存することで、貴重な資料の次世代への継承が可能となります。学校の改装や校舎移転等によって資料の散逸を防止するためにも、資料の整理を行い、統一的な目録を作成することで、学校及び地域の歴史を伝える貴重な資料が失われてしまわないように対処していくことが必要です。これらの学校資料を保存・活用していくには千代田区教育委員会だけでなく、区民をはじめ学校に関わる人々が力を併せていかなければなりません。

今回の報告書の刊行と「テーマ展示」を通じて、さらに学校資料の新たな価値が見出され、広く区民や区立小学校の卒業生など様々な人々と情報が共有され、学校資料が地域の新たな歴史・文化を創造していく原動力となることを期待しています。（学芸員 白井拓朗）

報告書『資料で読み解く千代田の小学校1』（税込1,000円）



日比谷図書文化館
1階ショップ
4階文化財事務室
千代田区役所
総合窓口

販売中

巻末には資料目録も掲載している。



【写真4】 小学校資料の収蔵状況

日本橋川周辺の大名屋敷と土地利用

ミニ企画展「日本橋川と大名屋敷」では、日本橋川に近接した大名屋敷をとりあげました。

江戸から東京に移りゆく中で、かつての大名屋敷跡地も、その用途が変わっていきました。ここでは、2ヶ所について、土地利用の変遷と現在における水辺との関りを紹介します。

軍用地から鉄道用地へ

◎飯田町遺跡（讃岐高松藩邸）

江戸時代に讃岐高松藩上屋敷として利用されていた千代田区飯田橋二丁目・三丁目の再開発地区は、明治になると小石川の砲兵工廠の付属地となりました。

一方で、明治時代には、河岸で荷揚げされた物資を各地へ輸送するため、鉄道網が発達していきます。東京市内でも、汐留（官営鉄道）・両国（総武鉄道）・秋葉原（日本鉄道）などが知られていますが、この場所もその一つでした。

山梨県出身の実業家雨宮啓次郎が中心となり、JR中央線の前身である甲武鉄道が新宿～甲府間に敷設されます。のち、東京市内への延長計画ができると、船から貨車への積み替えができるこの場所が最初の終着駅となり、日本橋川を介して、甲信方面と東海道・東北・房総など各方面との物資のやり取りが可能になりました（飯田町駅が廃止されるまで機能しました）。

再開発事業では、旧平川の河道の痕跡を表面復原した「平川のこみち」、線路を配して鉄道駅の痕跡をとどめる通路などがあります。



平川のこみち



大手町川端緑道

大名屋敷と水辺

◎一橋徳川家屋敷跡・大手町一丁目遺跡

日本橋川の南岸、一ツ橋から新常盤橋にいたる一帯は、親藩・譜代の大名屋敷が建ち並んでいました。西から一橋徳川家・出羽庄内藩酒井家・越前福井藩松平家となっていました。明治時代以降は、国有地となり、気象庁・大手町合同庁舎などに利用されていました。

近年では、大手町一帯の再開発が始まっていますが、千代田区では再開発事業者との都市計画の相談を進める中で、日本橋川の水辺に沿った空間を生かしたまちづくりを考えました。その結果、再開発で建設される建物と日本橋川の間、「大手町川端緑道」という遊歩道ができました。そこには、単に通路を確保するだけではなく、江戸城外堀の痕跡である石垣の紹介や各場所の由来を記した案内板を設置するなど、水辺と親しむ仕掛けを設けています。

千代田区では事業者の皆様の協力を得て、遺跡の保存や説明板設置など様々な取り組みがされています。現地にも足を運んでみれば、新しい発見があるかもしれません。

（学芸員 高木知己）



大判錦絵3枚続 縦 37.0cm × 横 73.2cm

今年6月、長谷川喜一さんから千代田区教育委員会へ寄贈された浮世絵版画をご紹介します。

本作は、明治23年(1890)に東京上野公園で開催された第3回内国勸業博覧会を題材にした浮世絵版画です。絵を手がけたのは、幕末・明治時代に美人画や風俗画で人気を博した楊洲周延で、博覧会に行幸する明治天皇の一行を描いています。

画面中央に立つ明治天皇は、黒い軍服を着た威厳ある姿で騎馬近衛兵を引き連れています。右手の華やかな装いの女性たちは、パッスル・スタイルと呼ばれるドレスを身にまとっています。これはスカートの後ろ腰を膨らませたドレスのことで、鹿鳴館時代を象徴する洋装でした。女性の顔をよく観察すると、髪が生え際まで一本一本彫り上げられており、当時の彫師の高い技術が認められます。

さて、浮世絵版画が取り上げられるときは、絵柄を描く絵師に注目が集まる傾向にありますが、今回は浮世絵版画の企画から制作、広報、販売までを請け負う版元に焦点をあてます。

画面左側の下辺を見ると、印刷・出版の年月日と版元の氏名・住所を示した出版届出が記さ

れています。版元の氏名は「長谷川常二郎」、住所は「神田区カチ丁五バンチ」とあり、本作が神田鍛冶町で版元をしていた長谷川常二郎から出版されたものだということがわかります。

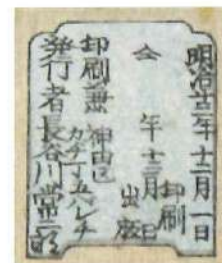
屋号を清水屋といった長谷川常二郎(常次郎、常治郎とも)は武家の出身で、天保2年(1831)に主家に暇を乞い神田鍛冶町で版元として開業したとされています^(注1)。実は今回本作をご寄贈いただいた長谷川さんは、長谷川常二郎のご子孫にあたります。

現在、千代田区は全国有数の出版・印刷業の街として知られていますが、時をさかのぼると江戸時代後期から神田を中心に多くの版元が営業をしていた場所でした。本作は、そうした区の歴史を示す貴重な資料です。(学芸員 洲脇朝佳)

(注1) 鍛冶町二丁目会編『鍛冶町のあゆみ』1973年



(部分拡大図) 生え際の彫り



出版届出

浮世絵に描かれた千代田区唯一の養蚕どころ

—紅葉山御養蚕所—

2014年「富岡製糸場と絹産業遺産群の世界遺産登録」に続き、2019年には国重要有形民俗文化財として「伊達の蚕種製造及び養蚕・製糸関連用具」が新たに指定されるなど、近年近代日本の基幹産業として隆盛した養蚕業に再び注目が集まっています。

では千代田区と養蚕の関係はどうでしょうか。この二つの繋がりにはなかなか連想しづらいものです。しかし全く無関係というわけでもありません。養蚕農家はありませんが、明治初期の霞ヶ関には全国の養蚕業を所管する内務省が置かれ、現在の帝国ホテルが建っている場所には東京農工大学工学部の前身にあたる蚕病試験場が存在しました。養蚕業が衰退したいま当時の面影はほとんどありませんが、千代田区は全国の養蚕業の振興を推進していく重要な役割を担った場所でした。

ところで、実は区内に毎年養蚕を行っている場所がひとつだけあります。それは皇居内の紅葉山御養蚕所です。明治以来歴代の皇后様が自ら蚕の飼育に携わり、国を挙げての養蚕奨励に一役買ってきました。そうした宮中での養蚕は明治期の浮世絵の題材と

してたびたび取り上げられています。写真の「女官養蠶之圖」もそのひとつです。女官たちが伝統的な衣装姿で作業に勤しみ、その様子を見守る画面右の青紫の着物のひとときわ大きい人物が昭憲皇太后（明治天皇皇后）です。こうした浮世絵もまた当時の養蚕繁栄の実態を示す大切な資料のひとつです。ただし実際の様子は公開されていないので、こうした宮中養蚕に関する浮世絵は基本的に絵師が想像のもとに描いていました。

今年は平成から令和へと時代が変わり、養蚕の行事も上皇后様から新皇后様に引き継がれました。すでに産業として衰退してしまった養蚕業ですが、宮中養蚕は近代日本国家を支えた養蚕業隆盛の歴史を今に伝える大切な行事です。（学芸員 山田将之）



三代歌川広重「女官養蠶之圖」個人蔵
明治17年（1884）



都営地下鉄 ●三田線—「内幸町駅」徒歩3分
東京メトロ ●千代田線
●日比谷線 —「霞ヶ関駅」徒歩5分
●丸ノ内線
駐車場 当施設に駐車場はありません。

開館時間 月～金 10時～22時
土 10時～19時
日・祝 10時～17時
文化財事務局 月～金 10時～18時
※企画展・特別展の観覧時間は異なる場合があります。
休館日 毎月第3月曜日
年末年始（12月29日～1月3日）
特別整理期間

文化財ニュース 第19号 (3,000部)
発行日 令和元年10月28日
編集・発行 千代田区立日比谷図書文化館 文化財事務局
〒100-0012 東京都千代田区日比谷公園1-4
TEL:03-3502-3348 FAX:03-3502-3361
HP: <http://edo-chiyoda.jp>
e-mail: bunkashinkou@city.chiyoda.lg.jp
印刷 株式会社サンワ